

檜原市昆虫館だより

G O N T A

(通巻30号)

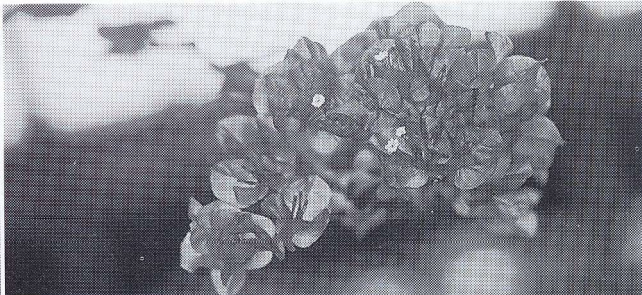
Vol. 8 No. 2

おんしつ かれい びじょ
温室の華麗な美女たち(8)

ブーゲンヴィレア



▲展示温室



▲ブーゲンヴィレア

昆虫館の展示温室では、主に沖縄地方のチョウを中心に放蝶しているため、温室内の温度は、真冬でも最低18℃以上に保つように温度管理しています。温室には数多くのチョウやハチドリが飛び交い、様々な亜熱帯の植物があります。その南国ムードをより一層引き立っているのが花たちです。花の種類もいくつかあり、今までこの美女シリーズで紹介した花も8種類となりました。そして今回の9種類目の花は、オシロイバナ科のブーゲンヴィレアです。(以下ブーゲン)

ブーゲンという属名は、太平洋を初横断したフランスの探検家ブーゲンヴィユの名にちなんだものです。一見1つの花のように見えるのは、3つの花が集まったもので、色のついた苞の内側にそれぞれ花を1つ付け、黄白色の筒状のものが花なのです。こういった花の構造を擬花と言います。



展示温室内には、3ヶ所にブーゲンがあり、アーチ状に仕立てています。2ヶ所のアーチは、開館当初にあったものなのですが、あとの1ヶ所は、自分達で園芸用の支柱を利用して作ったものです。ですから、木が茂って重くなると、支柱がしなり、だんだん下に下がってくるのです。でも、自分達で作ったものは、もろいかわりに、愛着もわいてきますね。

今では、定期的に補強をして、なんとか“アーチ”って感じにはなっているようです。

温室内の3ヶ所のブーゲンは、全て同じように咲く訳ではありません。同じように管理していても、場所によっては咲きにくいところもあります。ブーゲンは日当たりの良いところを好むため、日陰のところにあるブーゲンは咲きにくいのです。咲いたとしても、疎らにしか咲きません。一方、日当たりの良いところだとアーチいっぱい満開になるのです。

ブーゲンは、定期的に剪定をします。徒長した枝はもちろんのこと、園路にかぶさった枝も切ります。ブーゲンの枝にはトゲがあり、剪定のときにこのトゲがよく指に刺さったりします。ですから園路に伸びてくると、来館された方がケガをしないように切るのです。他のツル性の植物、例えば、ツルベルギアだと、園路に出てきたからといって切ることはありません。なぜなら、トゲがなく、ケガをする心配がないからです。

ブーゲンには夏場、害虫としてアブラムシが発生します。でも一時期だけのことなので、特に防除などはしていません。

訪花するチョウは、アゲハチョウの仲間がほとんどで、シロオビアゲハやジャコウアゲハが吸蜜に訪れます。しかし、ブーゲンの花にはあまり蜜がないのか、チョウはすぐに飛んで行ってしまいます。でも、ブーゲンでチョウが吸蜜している姿を見ると、「ああ、南国だなあー」という感じがしますし、ブーゲンが満開になると、温室全体が明るく華やかになります。まさしく温室の華麗な美女です。(山本)

見てみよう！

身近な昆虫たち(11)

いちばん小つちやなクワガタムシ

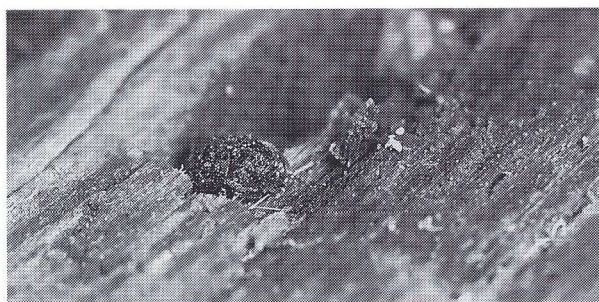
昆虫館では「樹液に集まる虫」というタイトルでこの冬は、冬中生きたカブトムシやクワガタムシを展示しました。コクワガタ、ヒラタクワガタ、アカアシクワガタの三種類のクワガタムシが展示ケースの中で冬を越しました。

ところで、最近はやや下火になりつつありますが、世はクワガタブームで、多くの人がオオクワガタなどのクワガタムシを飼育しています。大きなクワガタムシになると？万円という話もあり、少しでも大きな成虫を羽化させようと、幼虫の飼育技術も昔に比べると格段に進歩しているようです。

日本産のクワガタムシの仲間では大型の種類には、オオクワガタの他にヒラタクワガタ、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタなどがありますが、いずれも最大の個体になると、体長（大あごの先から上翅の端まで）8cm前後にもなります。

では、逆に小さなクワガタムシのことを皆さんはご存知ですか？

小さなクワガタムシの意味の名前の付いたコクワガタも、大きなものでは体長5cmを越えます。他にチビクワガタ（体長0.9-1.6cm）やマメクワガタ（体長0.8-1.2cm）などいますが、なんといっても小さなクワガタムシはマダラクワガタ。



▲マダラクワガタのオス

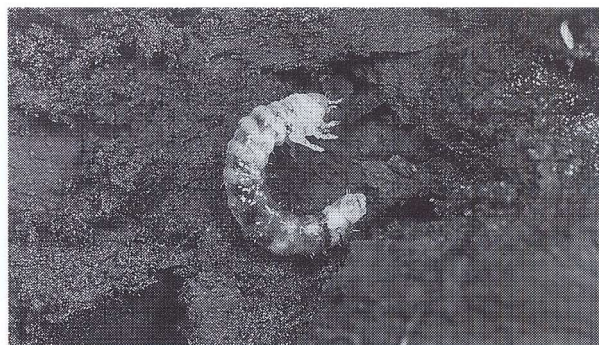
このクワガタムシは大きなものでも体長が0.6cmしかありません。しかも、体は丸く、背面は茶色の地に黒の斑点があり、一見したところではとてもクワガタムシには見えません。しかし、ルーペなどを使って、拡大して見ると、オスの頭には小さいながらもはっきりとした大あごが付いています。

また、マダラクワガタは、オオクワガタやノコギリクワガタのように樹液に集まることはありません。一生のほとんどを朽ち木の中やその周辺ですごします。

秋に朽ち木の中で蛹から羽化した新成虫は、その

ままだら^{ようしつ}蛹室の中にとどまって、冬を越します。そして、5-7月頃、外にでて^{はいぐう}配偶行動などの活動を行います。

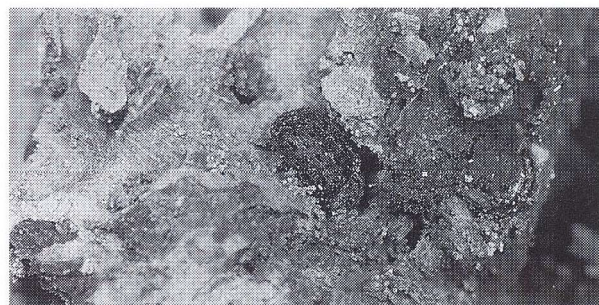
朽ち木に産みつけられた卵から孵化した幼虫は、約2年かけて朽ち木を食べて成長します。



▲幼虫

北海道から九州まで、このマダラクワガタはほぼ日本中に分布しますが、一般的には、ブナ帯など比較的標高の高いところに多いようです。ただし、奈良県下では、^{ひょうこ}標高1000mを越えるようなブナ帯でも見られるのですが、奈良公園（春日原始林）の周辺や、長谷寺の裏山など、標高200-300mの低山地でも、良い自然林が保たれているところでは少なくありません。

皆さんも、家の近く^{しゃじりん}に社寺林など大木の残るような良い林があれば、一度探してみてください。



▲朽木内にいたメス

尚、マダラクワガタの好む朽ち木には特徴があります。一般に、マダラクワガタが繁殖する朽ち木は^{せきかつしよく}赤褐色に朽ちている（^{あかぐさ}赤腐れ、^{かつしよくふきゅう}褐色腐朽）場合が多く、コクワガタなどの幼虫が好んで食べる古いシイタケ栽培用のホダ木などでは見つかりません。さらに朽ち木に適度な湿り気があり、縦や横にブロック状に手で割ることができれば最適です。

朽ち木の樹種は、^{じゅしゅ}カツラやサクラなど、広葉樹が多いのですが、モミなどの針葉樹でも時によって多くの個体を見ることができます。（木村）

ナガサキアゲハの累代飼育

ナガサキアゲハは、八重山諸島から本州の近畿地方まで分布しています。去年の夏には、昆虫館の周辺で飛翔しているのを確認、採集しました。このナガサキアゲハは南方系のチョウで、最近までは大阪府が北限でしたが、少しずつ北へと分布域を広げつつあります。原因は、食草（幼虫の食べるエサ）のミカンの栽培地を追っているという説や休眠することで冬を越えるためと考えられていますが、今のところ休眠説が有力視されています。

昆虫館では、ナガサキアゲハの累代飼育はもとより、放蝶温室へ放蝶することも夏場だけで途絶えていましたが、今回初めて、冬ものりこえられたので飼育について紹介します。

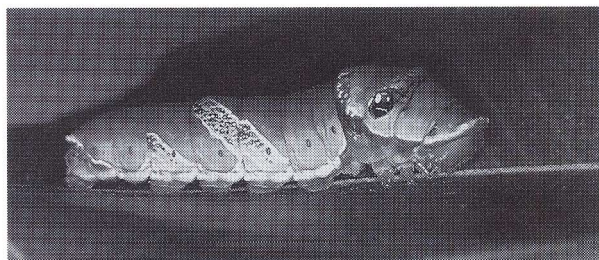
放蝶温室で放蝶し、累代飼育しているナガサキアゲハは、和歌山県と昆虫館周辺で採集したものです。

食草は、ミカン科ミカン亜科の栽培品種に限られ、ナミアゲハやクロアゲハ、モンキアゲハなどが食草とするサンショウやカラタチ、キハダなどのミカン科植物は食べません。

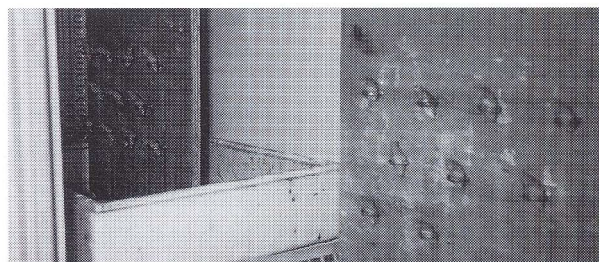
成虫は、翅を広げると約13～15cmほどあり、オスの翅は青黒く裏のつけねと後翅に赤い紋があります。メスとオスの違いは、メスの後翅に白い紋があることです。また、南の八重山諸島へいくと翅全体が白い個体（白化型）がいます。放蝶温室では、オスがメスを追飛しているところがみられ華麗です。

放蝶温室内に、採卵用のミカンの木を鉢植えにして入れて置くと、産卵してくれます。卵だけを飼育室へ持ち帰り孵化させます。卵の大きさは、約2mmあり日本産アゲハの仲間では一番の大きさです。卵の色は全体に黄色で、孵化が近づくと中央に茶色の斑点が現われ、約4～5日で孵化します。

孵化した幼虫には、柔らかい新芽を与えます。1～3令の体の模様はまるで、鳥の糞のような模様をしていますが、4令になると緑がかり鳥の糞のようにはみえません。終令幼虫になるとクロアゲハやモンキアゲハと同様に体は緑色になりますが白色の模様が特徴で、体長は約5cmと大型です。終令幼虫の食欲も旺盛で、大量飼育した時や冬場にはエサの確保が大変です。ミカンの葉は一度水洗いし、きれいにふきとってから使用します。また、1～4令まで新芽を与えますが終令になると堅い葉に切り替えます。飼育環境は、25℃の温度で長日条件下（15L-9D）



▲ナガサキアゲハの終令幼虫



▲羽化台

で飼育しています。

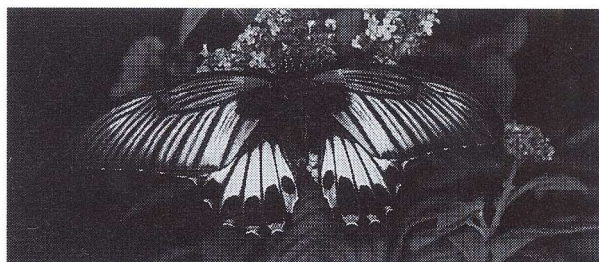
飼育容器の壁面やフタ、枝で蛹になると糸をはずし羽化台へ蛹を移します。乾燥に注意し、時々霧吹きをします。蛹に対する羽化率は、約70～80%です。

羽化台は、真鍮という金属のフックを板につけて利用しています。この方が管理をするのに大変都合がいいようです。金属と蛹が触れたまま羽化すると羽化率が悪くなると聞いたことがありますが、昆虫館では問題ありません。また、蛹から成虫がどんどん羽化していくのはうれしいことですが、黒くて大型のチョウのため、あまり大量に羽化させ放蝶すると気持ち悪がられますので、蛹の数が多い場合は、10℃の低温で保管し羽化時期を遅らせています。

放蝶温室で、いつでもナガサキアゲハが飛んでいるのがみられるように、累代飼育を続けていきたいと思っています。（島田）

ナガサキアゲハの生育日数（25℃/15L-9D）

段階	卵	1令	2令	3令	4令	終令	蛹
日数(日)	4～5	2～3	3～6	3～6	5～7	9～11	10～12
卵～蝶	約40日						



▲ナガサキアゲハのメス成虫（白化型）

「^{のう}脳と^て手によって^{しんか}進化した人類は、^{ひんるい}脳と手によって^{めつぼつ}滅亡する」

明治の生物学者 丘 浅次郎 (1868~1944)

●偉大なる落第生

落第生だった。歴史の点が悪かった。年号や歴史事項の単なる暗記に意味を見いだせなかった。作文も苦手だった。1年目は先生の計らいで進級し、2年に上がったが、西洋史を2年連続して不合格。結局、東京大学予備門を退学になった。

●丘浅次郎との出会い

ぼくが丘浅次郎の名前を初めて知ったのは、高校時代だった。だれかのエッセイだったと思う。「脳と手によって進化した人類は、脳と手によって滅びるをまぬがれぬ」と、人類の将来について予言した明治時代の生物学者・進化論者について触れていた。子供時代から「恐竜の絶滅の理由」や「人類の起源」なんかに興味をもっていたものにとって、明治時代にもすごい生物学者がいたものだと、衝撃を受けたのを覚えている。と同時に、地理や世界史、好きなはずの生物でさえ暗記が苦手だったので、偉大な落第生である丘浅次郎に共感してしまい、ますます勉強しなくなったものだから困ったものであった。

しかし、明治時代から1世紀近くが過ぎようとしていた時期に、丘浅次郎の著した書物が残っているのだろうか。そもそも丘浅次郎がどんな書物を残しているのかさえ知らなかった。とりあえず、放課後高校近くの駅前にある本屋にいつてみたところ、奥のだれも注目されない本棚の片隅に偶然見つけた。丘浅次郎『進化と人生』。発行年度は1976年であるから、たまたま文庫として再版されて、売れ残っていたのだろう。上・下巻2巻のコンパクトな文庫本であるが、題名から想像すると人生論風の教訓めいたエッセイかと思ったが、これがまた違っていた。

この『進化と人生』には丘の、生物進化に関する持論、生物に対する見方、生物学や博物学についての考え、教育論、などが分かりやすく歯切れのよい文章で述べられている（この時代の書物にすれば珍しく口語体で書かれていることもある）。そして、翌年に『生物学的人生観（『生物学講話』改題）』が同じ文庫から復刊。生物の生涯を『食うて産んで死ぬ』の三ヶ条に集約し、人間の生涯を様々な生物種と比較して、丘独特のユーモアを交えながら解説しており、現代の動物行動学や動物社会学の知見か



丘 浅次郎

ら考えても全く古さを感じさせないのは驚異である。図版なども交えながら、いずれの生物も具体的な生活の中で語られているので、大変分かりやすいのである。

理系クラスで生物志望者が少数のため、生物の授業が開講されず、生物を独学することを余儀なくされた。仕方なく受けて拷問のように感じられた物理学や数学とくらべ、この本はぼくにとって砂漠の中のアアシスだった。とにかくおもしろさといったら無類である。はしがきを1ページ読んだだけで、引きずり込まれ、一気に読んでしまった。生物の教科書が百冊束になってもかなうまい。

●丘浅次郎について

丘浅次郎は1868年明治元年、静岡県磐田郡掛塚町に生まれた。父・秀興が大阪の造幣局仲金場の責任者に任命され、一家は大阪の官舎で暮らすことになる。浅次郎は次男で、兄と妹がいた。官舎には造幣局お雇いの外国人技師が多数おり、西洋人の子供たちと遊びながら育った。幼少の頃から父親に英語の手ほどきをうけていたという。12才の時、旧制中学に相当する大阪英語学校に入学。学校の授業で扱う教科書は、数学でも歴史でも皆英語の教科書を使用していた。後年、語学の天才と呼ばれ、独自の世界統一言語を考案する素地は、少年時代から培われていたに違いない。しかし、少年時代、不幸が相次ぐ。妹の事故死をはじめ父母、兄を病気のため失い、16歳で天涯孤独の身となる。丘の独立独歩の性格はこのような境遇が影響したのだろう。

1882年、東京大学予備門（後の第一高等中学校、一高）を受験。本試験で不合格であったが、補欠試

験で合格する。同時代人としては、1884年に南方熊楠^{みなかたぐま}、夏目漱石^{げす}、正岡子規^{そうせき}らが予備門に入学している。予備門時代は将来、何を専攻するのか決めかねていたが、図書館で動物学の図版類を書き写している内に、友人たちから動物学者のあだ名をつけられ、丘自身その気になり、動物学を専攻しようと決心する。2年後に予備門に入学した南方熊楠も授業をサボって上野の図書館で、書籍類を乱読、書写していたというから、この二人が同じ図書館ですれ違っていたかもしれないと想像するだけで楽しくなる。

丘は歴史が苦手で、2年次の西洋史を百点満点の10点、20点しか取れず落第、翌年度も落第し、退学処分になる。なぜ、歴史の勉強に身が入らなかったかについて、『落第と退校』というエッセイのなかで述べている。それによれば、歴史上の出来事、例えば誰が何年何月に死んだとか、どこの戦争が始まったとかいうことを、覚えていることに何ら意味を見いだせなかったのである。そのことを先生との単なる歴史観の違いであるとだけ述べて受け流している。丘の歴史を見る目は、この原因があったから、このような結果が生じたというような、物の変遷^{へんせん}を好んだ。その歴史観は、後にベストセラーとなる生物進化の歴史について著作に感じられる。

予備門を退学になった丘は、1886年東京大学理学部動物学科の選科の試験を受けて合格。本科には、予備門を卒業しないと入学資格がなく、選科を卒業しても学士号は与えられないのだった。肩書だけの空疎な権威主義、単なる形式主義を嫌った丘にとっては、選科・本科は大した問題ではなかった。1889年、卒業論文「淡水産コケムシに関する観察」を提出して卒業。その後も動物学教室で研究を続ける。大学選科時代から、論文を読む際の不便さを軽減しようと、国際統一言語「ジ・レンゴ」を考案したりもした。

1891年、いとこの山崎覚次郎とともにドイツへ留学。山崎の実家が経営する山崎銀行から長期返済で留学費用を借りた私費留学だった。4月、フライブルグ大学に入学し、アウグスト・ワイズマンの指導をうけるが、その思弁的性格になじめず、翌年ライプチヒ大学へ移り、カール・ロイカルトに師事。ロイカルトのもとで研究した2年間は最も充実した楽しい研究期間だった。ロイカルトを唯一、生涯の師と仰ぐ^{あお}。フライブルグ大学在学中に偶然、ポーランド人医師ザメンホフが考案した世界統一言語エス

ラント語の入門書を手に入れ、日本人でエスペラント語を学習した最初の人となった。

1894年ドイツで博士号を取得後、帰国。山口高校（旧制）教授を経て、東京高等師範学校教授^{しはん}を62歳の定年まで30年間続けた。研究テーマはホヤ類やヒル類の比較形態学^{けいたいがく}で、当時の学会では、丘の研究は第一級と評価され、1925年には、帝国学士院会員に選ばれている。

当時の動物学・植物学といえば、新種を見つけては学名をつけるのに熱中していたのだが、丘は分類学的重要性については十分認めつつも、そのことが目的になってしまっている記載^{きざい}だけの分類学に不満であった。観察や実験に基づき、推理力^{すいり}を用いて、種属の違いをこえた生命現象の普遍的な法則を探ることが、旧来の博物学を脱して生物学が目標にしなければいけないことだと考えていた。このことを、著作の中で随所に主張している。

高等師範学校在任中、専門研究のかたわら、中学用の動物学の教科書を多数著し、1904年（明治37年）『進化論講話』を出版、一般向けの進化論の解説書として知識人をはじめ中学生からも読者を得てベストセラーになった。1916年には『進化論講話』をのぐといわれる『生物学講話』を出版。1918年には『最新遺伝論』を出版、当時の遺伝学の主流に反して、獲得形質^{かくとくけいしつ}の遺伝^{いでん}を主張したが、黙殺された。丘は、生物進化の長い歴史を見た場合、獲得形質の遺伝を認めないとうまく説明がつかないと考えていた。

また、『人類の誇大狂』、『所謂自然の美と自然の愛』、『動物界における善と悪』、『生物学的の見方』、『境界なき差別』などの刺激的なエッセイを発表。これらのエッセイからでも、丘の物事の見方、考え方が十分に理解でき、生物進化の歴史のなかでの生物種の一種としての人類の位置づけ、その可能性と限界まで論じていることを読者は驚かされるであろう。

晩年は著作・評論は一切止めてしまい、悠々自適^{ゆうゆうじてき}の隠居生活に入った。太平洋戦争敗戦の前年、1944年死去、77歳であった。『これまで生きれば、もうけっこうだ。』と語ったという。（敬称略）

◎参考・引用文献

- ・近代日本思想体系9『丘浅次郎集』 筑波常治 編集解説 筑摩書房 1974
- ・丘浅次郎『進化と人生』 講談社学術文庫 1976
- ・丘浅次郎『生物学的人生観（『生物学講和』改題）』 講談社学術文庫 1981

（中谷）

ハチドリの飼育(10)

ハチドリの繁殖とリサイクル

放蝶温室をひらりひらりと飛び交う蝶たち。そのあいだをくぐりぬける様に猛スピードで飛び去るハチドリたち。平成3年8月26日に初めてハチドリ11種26羽を放鳥し、6年半が過ぎました。また、これまでに当館での繁殖シーズンである秋から春にかけて、4シーズン連続でハチドリの2世が誕生しました。そこで、今回は今までのハチドリの繁殖記録をまとめてお知らせします。

ハチドリを放鳥し、約2年間はオアシスハチドリやシロスジエメラルドハチドリなどの巣作り、産卵、抱卵行動が見られました。しかし、無精卵なのか全く孵化せず、親鳥も途中で抱卵をやめてしまいました。なぜ、繁殖しないのか、種類が多すぎたのかなど、いろいろと原因を考えたりもしました。

その後、平成7年1月のある日、今まで巣作りをしたことがなかった、アオミミハチドリがアレカヤシの葉に巣を作り、抱卵行動を始めました。2世誕生のかすかな期待を持ちながら抱卵を見守りました。1月24日の夕方、親鳥が巣で抱卵していないのに気づき、巣の中をのぞくと、小指の先、約1cmも満たないひな鳥2羽を確認できました。そうです、当館で初めてハチドリの2世が誕生した瞬間です。その後、親鳥から口移して特製のエサをもらい、若鳥1羽は無事巣立ち、親離れをしました。また、4月4日にはブロンズインカハチドリのひな鳥も孵化し、2羽が親離れしました。

そして、暑い夏場をむかえ、平成6年のシーズンの繁殖は終わり、再び行動が見られたのは、平成7年10月20日のユキハラエメラルドハチドリからです。

温室内にハチドリのタンパク源として、ショウジョウバエをバケツで発生させています。その上空を素早く左右にホバリングしながら、クチバシで捕まえているのを発見しました。それを運んでいる後を追いかけて、水銀灯のフレーム内に作った巣を発見し、ひな鳥に与えているのを確認しました。平成7年のシーズンには、その後、アオミミハチドリ2羽、ブロンズインカハチドリ1羽の親鳥が子育てを行いました。また、1羽のアオミミハチドリは1シーズンに2回子育てを行い、4羽の若鳥を巣立ちさせました。2回目の時は新しく巣作りせず、前回使用した巣を少しクモの巣で修理し、再利用しました。今、流行のリサイクルです。

平成8年のシーズンも前年同様、ユキハラエメラルドハチドリ1羽、アオミミハチドリ2羽、ブロンズインカハチドリ1羽の3種が、巣作り、抱卵、孵化まで順調に進みました。しかし、子育ての途中でひな鳥が死んでしまい、巣立つ率が低く、結局、ユキハラエメラルドハチドリ2羽、アオミミハチドリ1羽の若鳥しか巣立ちませんでした。なぜなのでしょううか？

そして、昨シーズン(平成9年のシーズン)は、まず、平成10年1月6日にアオミミハチドリがハイビスカスに作った巣のひな鳥が孵化し、次いで1月28日には別のアオミミハチドリとブロンズインカハチドリのひな鳥が同じ日に孵化しました。また、最初に子育てを行ったアオミミハチドリは、4月1日現在、新しく巣作りをし、今年3回目の子育ての準備をしています。その他にもアオミミハチドリ、ブロンズインカハチドリが、2回目の抱卵と子育てを、ユキハラエメラルドハチドリが、今シーズン初めての子育てを行っています。

そこで、現在までの繁殖記録を表にまとめて見ました。

ハチドリの繁殖記録

繁殖回数	1回目	+	2回目	+	3回目
◎平成6年シーズン(平成7年1月～5月)					
アオミミハチドリ	1羽				
ブロンズインカハチドリ	2羽				
◎平成7年シーズン(平成7年10月～平成8年5月)					
アオミミハチドリ	2羽	+	2羽		
アオミミハチドリ	2羽				
ブロンズインカハチドリ	1羽				
ユキハラエメラルドハチドリ	2羽				
◎平成8年シーズン(平成8年10月～平成9年5月)					
ユキハラエメラルドハチドリ	2羽				
アオミミハチドリ	1羽				
◎平成9年シーズン(平成10年1月～4月1日現在)					
アオミミハチドリ	2羽	+	1羽	+	抱卵中
アオミミハチドリ	2羽	+	抱卵中		
ブロンズインカハチドリ	2羽	+	子育て中		
ユキハラエメラルドハチドリ	子育て中				

平成10年4月1日現在、3種22羽の若鳥が巣立ちました。

4月1日現在で、延アオミミハチドリ13羽、ブロンズインカハチドリ5羽、ユキハラエメラルドハチドリ4羽の3種22羽の若鳥が巣立ちました。この号が発行される頃には、きっと子育て中の若鳥も巣立っていることでしょう。

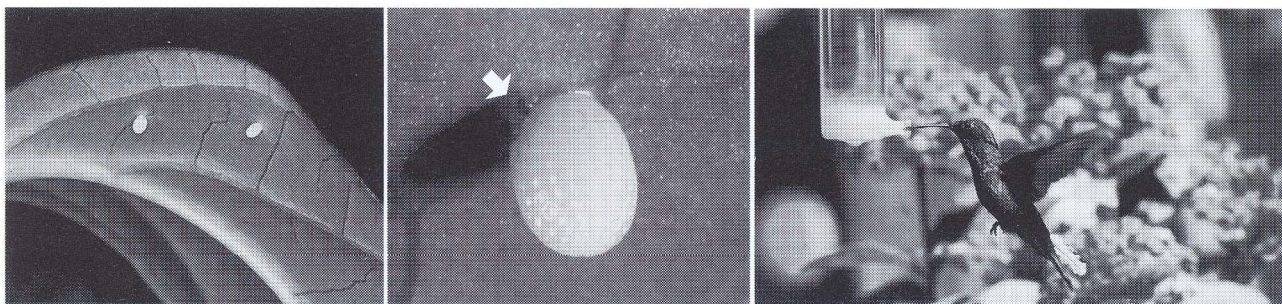
それでは最後に3択クイズです。ハチドリは英名でハミングバードといいますが、その名の由来はどれでしょうか？ (久米)

- ①鼻声で歌うような鳴き声の鳥
- ②小さく蜂のように飛んで行く鳥
- ③蜂のようにブンブンと唸る鳥

答えは「③」

おんしつ
温室だより(2)

～ハネ・コレクション'98～



▲左からホウライカガミ上のオオゴマダラの卵・その卵にとまる卵寄生蜂(キイロタマゴコバチ)・フィーダーで吸蜜するアオミミハチドリ

昆虫館の周りは、若葉が生い茂り、まさに春爛漫。
温室では、さらに季節が進み、もう初夏のようです。

朝の作業を紹介した前回に続き、今回は夕方の温室をご紹介します。朝と同様、水やり等の作業はありますが、夕方だけの仕事のひとつが“採卵”です。温室にはチョウの種類に応じて、7～8種類の食草の鉢植えが置いてあります。その葉や枝に産みつけられた卵を飼育容器に集めるのです。卵の大きさは、最大で2mm。注意深く、一卵ずつ指先ではずして容器に入れます。湿度の高い日や産みだての卵は卵殻が柔らかくて潰れやすく、逆に乾いていると指先で弾きとばしてしまうこともあります。飛んでいったら、もう見つかりません。コンタクトレンズを探すよりも難しいです。また、スジグロカバマダラ等の小さな卵では、ホコリと卵を見間違ったり、見落としていて気付いた時には幼虫が葉っぱを食べていたり…。採卵は細かい作業で面倒ですが、一日でもサボると、チョウの卵に寄生蜂が産卵し繁殖するので、必ず毎夕採卵します。さらに、卵の数はチョウたちの健康のバロメーターにもなるのです。

次に、一風変わった仕事として“死体回収”があります。温室を隅から隅まで歩きまわってチョウの死体を集める仕事ですが、良い呼び名とは言えませんね。昆虫館では、オオゴマダラとスジグロカバマダラの翅にマーキングをしています。毎日死体を回収すれば、チョウの寿命がわかります。他の種についても、現在何頭飛んでいるかの目安になります。チョウを飼育して放すだけでなく、死体回収から現状を把握したり、寿命を調査したりするわけです。

さて、“死体回収”では思わぬ拾い物をする場合があります。大半は枯れ葉やゴミ、ガやゴキブリの死体ですが、たまに“宝物”が見つかるのです。それは、ハチドリの抜け落ちた羽根。大きな羽根、小さな羽根…色々な羽根に出会うことができます。金属光沢

で青や緑に光るものもあります。見て美しいばかりか、「これはオオハチドリの羽根だ!」「これはアオミミハチドリの?」等と推理するのも面白いものです。換羽期(羽根の生えかわる時期)には、結構拾うことができます。

ところで、私は春からハチドリ担当の一員になりました。今、ハチドリの飼育について勉強中です。ハチドリの餌は主として花の蜜です。しかし、温室内でチョウと共存していくには蜜が不足してしまいます。そこで、温室内36ヶ所にフィーダー(ハチドリ用の餌のビン)を吊るしています。

朝8時30分。出勤すると、まずハチドリの餌作りです。粉末の餌を水で溶かし、フィーダーに入れて交換します。このように書くと簡単そうですが、フィーダーにより10～80ccまで餌の量が異なります。実は、温室でも場所によって、ハチドリがよく吸蜜する所とそうでない所があるため、毎日吸蜜量(餌の減少量)を測って、フィーダー毎に量を調節します。36本のフィーダーに入れると、いよいよ交換です。温室を一周しながら順番に交換します。初めは配置図の番号と照らし合わせながらですが、慣れてくると位置を覚えてサッサと換えられるようになります。ところが、最後まで来るとフィーダーが一本余ったことがあります。どこかで一本とばしてしまったのです。一本ずつ量が違うので、間違った所まで全部やり直しです。焦ってフィーダーを落として割ってしまうこともありました。スムーズに交換が終了し、すぐにハチドリが飛んできて、吸蜜してくれるとホッとします。交換が終わると吸蜜量を測り、フィーダーを洗って終了。これを一年365日、朝と夕方の二回おこなっています。

最近、夢ができました。光り眩い大舞台で、パリコレならぬ「ハネ・コレクション in 昆虫館」を開くのです。デザイナーは勿論ハチドリです。(日比)

ざっ き ちよう 雑記帳

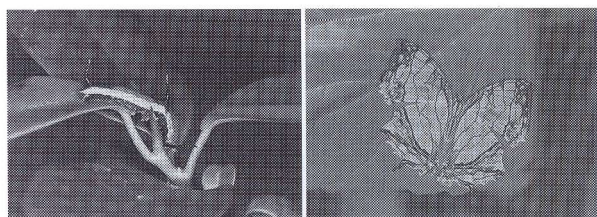
～イシガケチョウについて～

今までGONTAの中では、いろいろなチョウを紹介してきました。タテハチョウ科の仲間では、コノハチョウ・カバタテハ・タテハモドキなどが登場してきましたが、今回は、^{はね}翅がボロボロのように見え、ひ弱そうなチョウ？イシガケチョウを紹介したいと思います。

イシガケチョウは、本州（奈良県・三重県・和歌山県・山口県以南）・四国・九州・南西諸島に分布しており、外国では、インド・オーストラリア区を中心に分布し、アフリカにも生息しています。

また、イシガケチョウは、成虫で越冬し、^{た か せい}多化性で年4～5回発生し、八重山諸島では、冬でも発生をくりかえしています。^{けいりゅうぞ}生息場所は、林縁、溪流沿いの林や、人家周辺などでみられます。幼虫のときには、クワ科の植物（イヌビワ・ガジュマル・イチジク）などを食べています。幼虫の姿は、ナメクジ型で、^{じゃくれい}若令幼虫のときは、体全体が茶色っぽい色をしていますが、終令幼虫になると、体全体が緑色になり、^{とつき}背中やお尻のところに、つのような突起があるのが特徴です。

成虫の特徴は、翅の色が白色～乳白色の地色を持ち、また、翅全体に黒っぽい線が交差していることです。イシガケチョウの翅を見ていると、まさに、



▲イシガケチョウの幼虫

▲イシガケチョウの成虫

地図模様のようです。また、翅がボロボロのように見えますが、羽化したての個体でもこのような翅なのです。

イシガケチョウは、花蜜を好み、ミカン・ビワ・クリなどの樹木、レンゲソウ・ヒヨドリバナなどの草本の花にもよく吸蜜に訪れます。また、動物の死体や、排泄物をも好み、川辺や路上へ吸水にもよく訪れにやってきます。その他の特徴では、翅をとめたまま、^{かつくう}滑空をまじえて飛び、軽快で敏速なことです。

このイシガケチョウの名前の由来ですが、翅の模様が石崖の模様に似ているため、それを連想させてつけられたようです。また、別名をイシガキチョウともいいます。この蝶を温室内で放蝶したことが何度かありましたが、まだ、累代飼育ができていないので分からないことがたくさんあります。今後もイシガケチョウを放蝶していきたいと思います。(松村)

いんふおめいしよん

▶ 5月 第19回観察教室

「ハチの生活をしらべよう！」

日時：5月23日(土) 午後1時30分～3時30分頃

場所：昆虫館 会議室

内容：ハチたちの興味深い生活を紹介

対象：小学生以上～一般、35名まで

持物：筆記用具 参加費：無料（要入館料）

申込：5月13日(水)午前10時より電話受付、先着順

▶ 6月 ホタル観察会

日程：6月27日(土) 雨天中止

午後5時、昆虫館会議室集合～野外観察(バス)～

午後9時頃、昆虫館にて解散

内容：職員と一緒に、ホタルを野外で観察

対象：橿原市内在住で、小学生以上の親子か家族

持物：夕食・水筒・筆記用具・雨具等

定員：60名 参加費：無料

申込：往復葉書にて（詳しくはお尋ね下さい）

▶ 7月 夏の虫観察会

日時：7月26日(日) 午前10時30分～午後3時頃

場所：昆虫館と周辺（徒歩約3km）雨天中止

内容：雑木林や野山で見られる昆虫たちの観察

対象：小学生以上で親子又は家族単位、50名まで

持物：弁当・水筒・帽子・筆記用具など

参加費：無料（要入館料/大人310円・学生210円・小人100円）

申込：7月15日(水)午前10時より電話受付、先着順

◎「橿原市昆虫館友の会」ができました。入会受付中！

くわしくは昆虫館内の事務局へお尋ね下さい。

橿原市昆虫館だより GONTA Vol.8 No.2

1998年4月25日発行 (通巻30号)

編集・発行/橿原市昆虫館

〒634-0024 奈良県橿原市南山町624番地

Tel.0744-24-7246 Fax.0744-24-9128

印刷/丸善平版印刷社